

異文化の吸収と交流を



異文化の押し付けは紛争・戦争の火種となるが一方異文化の吸収は多様な変化を予約する。他方、逆の努力つまり純化への夢想は執念を生むがやがて単色の中で生まれた停滞が色を失わせる。社会の有り様も人の生き様も似たような経緯を辿るようだ。

「昭和という国家」と謳った本が出た。これを聞いて「明治という国家」と題した本を憶い出した方も多いであろう。共に司馬遼太郎氏の著であるが、前者は所謂「維新」ではなく『明治』という国家を現出させたのだという主張をあらゆる史実を例に述べ、その成功の秘密は薩長土肥等の各藩風の中で育っていた多様性（政治の薩摩、官僚の長州、民権の土佐、行政の佐賀）にあり、その間で綱渡りに似た経緯を経て回天という大事業を実現していったのに対し、後者は国として発展の途次遭遇した祖国防衛戦日露戦争に辛勝し（又は引分け）た時を転機に統帥権という絶大な単色権力を手にした人達の独善と偏見によって道を外し、『昭和』の半ばに向かって坂を転げ落ちるように破綻していった現実と諄い程の悔悟と糾弾を繰返しているのが極めて印象的である。

氏はそれが地方から出てきて幼年学校に入り、士官学校、陸軍大学と閉鎖社会で育ち、日本陸軍が世界一と思っていた比較を知らない人達に代表される専横の階層に責任があったと断じている。後進時代には保護育成が必要だが先導社会に転換した時は迅速な遅滞ない心身の鍛えが必須ということである。

経済界の話にもつてくるなら昨今は殊の外産学官の間の協力が叫ばれ様々な振興策が相継いで打たれているが、未だ始動段階にあるにも不拘、その効果や成果について早くも疑念が起始めている。理由はあれこれ考えられようが詰まる処、標榜す

る価値観の違いに要約されよう。学会の評価基準はアカデミズムへの貢献度であり、学者・研究者はこれに準拠し且つ束縛される。束縛が行き過ぎて現実的効用を忌避する純粹基礎指向が潜在することも多くあり、基礎のための基礎研究が奨励されてもいるが、之迄機械文明の骨格を築き上げてきた西欧の思考の道筋をみると基礎のための基礎ではなく、目的あつての基礎、所謂目的基礎という性格が太い。ノーベル賞受賞者の多いMITの陣容をみてそれが云える。この両者の違いの根源の議論は扱っていて、米国等と比べて産業界との間の遙かに遠い距離を縮めるには必竟、学会人が産業界に産業人が学会に移って互いに異文化を吸収してゆくことにおいてのみその達成が可能となると思われる。最も油の乗りきった五十歳台前半の交換が果たせるなら当事者は素より社会の根幹も活性化されるに違いない。

そこで話は冒頭の言葉になる。私達は自分達の変革・リストラを通じ、遅しく生き延びてゆくためには異文化と積極的に交流してゆくことである。その道の発見は自らの過去や経験を意識する時遠のき、それらを捨てた時新鮮に会得される。ここ迄来ると、吾人の日常生活の中にも同根の現象が潜むことに気がつく。一例が夫婦喧嘩も同じで共に被害者意識で武装している間はいつ迄も続く。生れも育ちも違う異文化間の争いだからである。

二酸化炭素の排出権も売買の種にしてしまう米国の経済的創造性に対する許容量の限界設定という合意自体が経済に利用されることへの倫理的反撥等、異文化間の相克は常に生まれ且つ根源的である。

東京大学・名古屋大学 名誉教授
日本真空技術(株)技術顧問 内田 岱二郎